

高木 彬光（たかぎ・あきみつ）

1、プロフィール

戦後にはじまる本格推理小説の旗手で、日本ミステリー界の代表的作家。トリック・メーカーでは第一人者。

<生没>

1920(大正9)年9月25日 ~ 1995(平成7)年9月9日

<代表作>

『刺青殺人事件』『わが一高時代の犯罪』『人形はなぜ殺される』『成吉思汗の秘密』『妖婦の宿』

<青森との関わり>

青森市に生まれる。詩人高木恭造の甥。青森を舞台にした長編推理「魔弾の射手」を東奥日報に連載する。

2、作家解説

本名誠一、大正9年青森市生まれ。青森中学より旧制一高を経て、京都大学薬学部に入學、ついで工学部冶金学科に転じ、昭和18年に卒業して中島飛行機会社へ入社、技師生活を送った。終戦により離職、窮乏の状況のなかで探偵小説を書くことを決意する。

原稿用紙が入手困難なため、藁半紙を用いて一気に書き上げたのが、処女作の『刺青殺人事件』である。易者からのアドバイスも容れて、江戸川乱歩に生原稿を送りやがてそれが折り紙付きで認められ、出版の運びとなった。

『刺青殺人事件』は胴なし死体という斬新な着想、日本家屋で密室を構成した趣向、意外な真相のどれをとっても、日本の本格ミステリーの名作といえよう。ことに、トリックの大きさでは並ぶものがない。つづく『能面殺人事件』では探偵作家クラブ賞を受け、『呪縛の家』『わが一高時代の犯罪』『人形はなぜ殺される』などの力作を相次いで発表、日本ミステリー界の代表的作家となった。

最大の功績は、乱歩の明智小五郎や横溝の金田一耕助と並ぶ天才型名探偵の神津恭介を誕生させたことであるが、他に私立探偵大前田英策、青年弁護士百谷泉一郎、検事霧島三郎、グズ茂と呼ばれる近松検事、アナリスト墨野隴人などの個性的な探偵を作り出した。

また歴史推理にも意欲を示し、『成吉思汗の秘密』『邪馬台国の秘密』『古代天皇の秘密』の記念碑的な作品を書いた。さらには経済ミステリーの『人蟻』『白昼の死角』、法廷推理の『破戒裁判』『誘拐』、新本格ものの『黒白の囧』『検事霧島三郎』『霧の罨』『帝国の死角』『大東京四谷怪談』など幅広い活動を続けている。

3、資料紹介

○『刺青殺人事件』

図書

1948(昭和 23)年5月 30 日

210mm×145mm

岩谷書店刊。昭和 28 年に改稿版を春陽堂より刊行。逆密室や大蛇丸、自雷也、綱手姫の刺青における三すくみを利用した心理的トリックなど、独創的な着想が戦後の推理小説界に多大の刺激を与えた。